



志摩地域における共生共学の 実践の保存と継承

三重大学教育学部 栗田季佳

共生共学とは

- 「共に生き共に学ぶ」教育実践—共生共育論
- とりわけ、「共に生きる」ことから排除されてきた障害児教育の文脈において、1970年代以降に発展してきた。
- 障害のある子どもとない子どもが普通学級で共に学び、能力差や特性の違いなど関係なく、せめぎあいながらつながり、共に育つことを志向する。

⇔特別支援学級や特別支援学校での専門教師による個別指導・支援・・・現在の日本の主流

※障害児が普通学級から排除されないことは、障害者権利条約でも求められている（2014年日本政府批准。第24条）。

- エピソード：伊勢神宮

志摩地域の共生共学の背景

- 近辺に特別支援学校がない。
 - 片道2時間 or 寄宿舍
 - 漁業を中心とした村落共同体
⇒元々、地域の学校に障害児が通っていた。
- 同和教育の素地
 - 同和地区があり、反差別に基づく教育実践が盛んであった。
- 1980年代、障害児を抱えるクラスの教師らが子ども、保護者、地域の人々とつながり、つながりを広げ深め、活発に展開した。



共生共学を学生たちに引き継ぐ意義

- 志摩の共生共学の実践はほとんど知られておらず、中心を担っていた教師らの退職により、現場の記憶も薄れている。
- 障害児教育, 「特別」支援教育を受けてきた障害児の声
 - 「友達がほしい」「いくらがんばっても『障害者』」「健常者と関わるのが怖い」・・・
- ⇔ 共生共学で育ってきた障害のある子どもや仲間の生きる力、自然な関係、当たり前にある「支援」
- 異質な他者を排除せず、清浄無垢ではなく清濁併せ吞むように成長する子ども達

教育の根幹、本質

プロジェクトの実施計画

- 。実践を担った教師を中心に，共生共学で育った障害者や保護者，支えた人達へのインタビュー。
- 。志摩の学校，「あるがまま」を大切に営むアトリエでのフィールドワーク。

➤記録化による記憶の継承，エンパワメント。

➤共生共学の記憶に触れ，障害者と共に生きる空気を吸い，D&I時代の教育実践者の育成。

